永寿の森

ここは森。５００年以上前から衰えることなく栄え続けている大きな森である。
その森の中心にはこの森で一番大きなご神木がたっており、緑も豊かで動物も数多く生きている。

人々はこの森を「永寿の森」と呼んだ。
人々は永寿の森が５００年も栄え続けているのは森には神様がいると信じ、森に入ることを制限し、森のご神木に供え物などして祀ってきた。それは今も続いている。

最近の若者は、神様、幽霊など信じていない人も多いだろう。
しかし、永寿の森には確かに神様は存在していた。

■■■■■

「・・・あら、また珍しいお客さんが来たみたいですね。」

ある少女がそうつぶやいた。まだ年端もいかない容姿をした少女で、黄緑色の髪で白色のシンプルな浴衣を身にまとっている。

「・・・どうしたの？」

その少女に膝枕をされながら昼寝をしていた少女よりもさらに幼い少女が眠たそう顔をしながら目を半分開けて問いかける。

「どうやらお客さんが来たみたいです。…二人ほど」
「・・・敵？」

少女が前を見据えながらそう言うと、先ほどまで寝ていた幼女が少々殺気だち冷たい目をしながらそう問いた。

「大丈夫ですよ。知り合いで・・・まだ眠いでしょう。もう少しおやすみなさい，紫苑（しおん）」

少女は紫苑と呼んだ幼女が殺気立っているのを宥めるように自分の膝の上に乗っている紫苑の髪を二、三度撫でてやると、紫苑も安心したようで再び少女の膝の上で目を閉じた。

少女と紫苑は永寿の森の中心であるご神木を背に座りただじっと静かな時間を楽しんでいた。
森には滅多に人が来ない。人が森の出入りに制限をしているからである。
これが彼女らの日常。
そして、この少女こそが永寿の森の神様である…
そんな永寿の森に足を踏み入れたのは２人・・・・

■■■■■

ザッザッザ・・・草を踏み分けて森を進むのは二人の男であった。

永寿の森は水も緑も豊かだが人が手入れしている訳ではないので自然のまま放置されている。
なので、少々道を選ばないと腰ほどまでに成長した草が進行の邪魔をしてしょうがない。

ザッザッザ・・・二人のうち前を先に歩く男が草をかき分けて、森の中へ中へと足を進めていく。もう一人の男は前の男がかき分けて出来た道をそのまま進む。

「だぁぁぁ・・・！邪魔だな、おい！！」

前を歩いていた男がとうとう痺れを切らして叫び歩みを止めた。必然的に後ろを歩いていた男も同様に歩みを止める。

「なんなんだよ、この草！草！草！道じゃねーか！」

「お前がこの森の入り口から入らないからだろう」

後ろを歩いていた男が淡々と正論を述べる。
森は確かに人の手が加えられてないが、人が森のご神木にお供えをするために森の入り口から、ご神木までの一本道だけは人が通るために整備されているのだ。
前の男はギロリと後ろの男を睨みつける。

「じゃあお前が前歩けよ！緑覚（りょくさ）！」

「何故、俺が・・。そもそもお前が私を無理矢理連れてきたのだろう。黒鵺(くろぬえ)」

本当はここには来たくなかったという表情をしてため息を吐く緑覚と呼ばれた男は眼鏡をクイっと上げた。

「そもそも何故こんな所に・・・。この森の精気は俺らにはキツい・・。」

眉をしかめながら空を見上げる緑覚。空には鳥がたくさん飛んでいた。

「わかってる・・・野暮用だ」

先ほどの苛立ちはどこにいったのだろうか・・

黒鵺はもう一度前を向き直し草をかき分けて歩き始めた。緑覚もなんだかんだで、ため息をもう一度し、前を進む黒鵺の後ろを着いていく。

目指すは森の中心・・・

続きは、QRコードからダウンロードして下さい。